

市内戦争体験者による

「戦争体験」の記録



あきる野市

この大戦がもたらした惨禍を、
もっと広く深く掘り下げて記録し語り継ぎ、
ふたたび戦争が起こらないよう、起こさないよう努力することは、
国民の大きな責務である。

（秋川史市より）

真に過去を知り、
現状を正視するもののみが
正しく未来を予見する。

（五日市町史より）

目次

(敬称略、受付順)

はじめに	
小学生の薪背負い勤労奉仕	
私の戦争体験	
罹災	
東京大空襲	
先の世界大戦を顧みて	
終戦の日	
戦争体験談	
戦争体験	
空襲された五日市線に乗っていた私	
来住野 治代	4
玉利 達夫	6
宮田 俊雄	8
宮田 俊雄	11
橋詰 勝茂	15
影山 花子	16
影山 保	18
田野倉 清	20
中島 元利	22

子どもと戦争	中島 祐子	24
兄とその家族、そして私	瀬沼 辰正	26
満州開拓義勇軍・召集・シベリア抑留	小林 茂雄	28
「負けてしまう…」と言ったために	中村 靖子	30
だまされて飢えと極寒のシベリアへ	小池 長之助	31
私の戦争体験	岡 道子	33
おわりに		35

（随所に戦時中の概況説明をした「あきる野コラム」を掲載しています。）

はじめに

戦後七十年を過ぎ、全国的にも戦争体験者が減少の一途をたどる中、戦争体験者の実体験に基づく惨禍を記録し伝える時間は、貴重なものとなっています。そして、体験者自身の言葉は、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、自身の願いであり、次の世代に新たな思いを生み出させる力があると信じています。

このような思いの中、あきる野市では平成二十九年十一月から十二月にかけて市内にお住まいの方の戦争体験談を募集したところ、七十九歳以上の十四名の方から寄稿していただきました。

辛い記憶をたどる作業や力の必要な執筆作業など、皆様それぞれの思いで大切な記憶や想いを市役所までお届けくださったものと思います。

皆様の想いとご尽力に心から感謝の意を表します。

お寄せいただきました原稿は、執筆者のご趣旨を最大限に尊重し、極力、内容はそのままとし、受付順に掲載させていただきました。

この「戦争体験」の記録が、今、日常にある「戦争のない平和な暮らし」が当たり前ではないことを、ここあきる野市でも、数十年前には飛行機から身を翻すように隠れて、逃げて生きていた時代があることを知り、未来の平和について考えるきっかけの一助となることを願っています。



小学生の薪背負い勤労奉仕

来住野 治代

我が家の土蔵の中には、片足の欠けた小さな背負い梯子があります。こんなに古い汚れた梯子ですが、私には生涯忘れられない思い出がいっぱい詰まった梯子です。

この梯子は、私が小学五年生の時、お国のために働く孫のためにと祖父が作ってくれたものです。私の父は六歳のとき、戦争で戦死してしまい、もう顔も覚えていません。祖父と母はよく空を飛ぶB-29飛行機を見ながら、田畑を耕し養蚕をして、妹と二人、一生懸命に育ててくださいました。

太平洋戦争が激しくなり、東京や八王子など都市が空襲で焼かれ焼け野原となりました。夜、南の空が火で真っ赤に染まり、艦砲射撃の火の玉が飛ぶのを見ていました。働ける男の人は皆、戦地に召集され、残っているのは老人と女の人や子どもばかりでした。

その頃、学校も疎開児童が多く教室が足りず、講堂などで二部授業をしていました。私も五年生で、教室で勉強などしていられず、農家に草むしりやお蚕の勤労奉仕にでかけました。家政女学校の上級生は、何か雲母など使い学校工場で働いていたようでした。

私たち五年生は、寒い冬の日、まだ雪が残っている深沢山や小和田の広徳寺の山へ薪背負いの勤労奉仕に行かされました。軍隊で使う燃料でしたでしょうか、その薪を背負

い深沢から町まで梯子で運びました。大人でも重い、二束掛の薪二束を小学生が背負わされ、長い道中を歩くのは大変きつい労働でした。まだ雪の残る細い山道を転落しないようにソロソロと下る。沢伝いの道は小石が多く、非常に危険でした。大人に「口車に乗っても、石車には乗るなよ。」とよく言われたことは忘れません。

深沢奥の道端で休憩していると、突然山の上から大きな石が転げ落ちてきて、アツと言う間に逃げ遅れた友達の頭に当たってしまいました。アツ、血だ、皆大騒ぎになりました。先生が怪我をした友達を負ぶって、町のお医者に行きました。あの頃は、自動車などこの家にもありませんでした。ある友達は、薪を背負ったまま沢に転がり落ちました。

こんな恐ろしい思いをしても、私たちはお国のためにじつと我慢して、重い薪を背負って頑張りました。勤労奉仕とは苦しいものだと思いつながら、日本が勝つために薪を背負いました。

ある日、私たちが朝から薪を背負い、深沢道を歩いていくとき、突然、空襲警報のサイレンが鳴り響きました。山一つ超えた浅野セメント工場が敵機に襲われました。友達のお父さんがそのとき撃たれて亡くなったと聞きました。道を歩いていた私たちはどうすることもできぬ間にいきなり、敵機P-51が急降下して、私たちの薪背負いの列を狙って機銃掃射を浴びせてきました。ヒューダダダつと、機銃弾がすぐ前の雑木林に撃ち込まれました。私たち生徒は、ワツと悲鳴を上げて道端の材木の隙間に頭を突っ込んで避難しました。敵機が去って、皆を見ると隠れていたのは頭

だけ、だれかが「死なば諸共よ。」と呟きました。あたりに
は、薬莢の欠片がたくさん落ちていました。今もあのとき
の光景が目に残ります。皆震えながら、道端に投げ出さ
れた梯子に這い寄って、梯子を抱き寄せ、心の中で「お母
ちゃん、お母ちゃん。」と呼んでいました。でも、歯を食い
しばって我慢しました。

そのような恐ろしい思い、苦しい悲しい思い、悔しい思
いをじっと見てきた片足の折れた小学五年生の私の梯子が
今も土蔵の中にあるのです。

クラスでも小さかった私が、毎朝、母の着物をほどこい
作ってくださったモンペをはき、あの頃は服など売ってい
ないので、親御さんたちは着物をほどこいて、服を作り着せ
てくれました。

梯子を引きずるように背負って小学校に行く私の後姿を
見て、母は、「こんな小さな女の子が薪を背負うのかと、あ
われで涙で見送った。」と後に話してくれました。

あれから七十二年、孫も私と同じ小学校に通っています。
つくづくこんな小さい子が、お国のためにと、薪背負いし
たのかと、今さら哀しい世の中があっただなと思います。
今の小学生を見るにつけ、きれいな服を着、思うことが
でき、自由に思ったことが言え、素晴らしい世になったん
だなと思います。

もう戦争はこりごりです。日本が、そして世界が、平和
でいられますように。

私の梯子も静かに土蔵の中で何十年も眠っていること
でしょう。

戦時下の子どもたち

昭和16年、国民学校令が交付され、明治以来長い間人々
に親しまれてきた「小学校」の名称は、「国民学校」に改め
られました。国民学校の実施は戦時下における大きな改革
であり、教育方法としては「練成」という原理を立て、戦
争の継続に役立つ国民の育成が目的とされました。方法と
しては「必勝の信念」や「堅忍持久」の精神のもと、「行」
や「型」による教育や宮城遥拝（皇居の方向に向かって敬
礼すること）、かけ足訓練、団体行進などの団体訓練が行わ
れました。また、当時は自由主義、個人主義といった言葉
は非国民用語として極端に排撃されました。戦局は、年ご
とに厳しさを増し昭和19年には、「国民学校令等戦時特例」
や「学徒動員実施要綱」が定められ戦争一色に染まりまし
た。当時の初等科の児童も「勤労奉仕」として銃後の護り
の第一線に動員されました。

【当時の小学生の勤労奉仕】

- ・養蚕の手伝い…まゆかき、桑つみ、桑はこび、ひき
り拾い
- ・農作業の手伝い…草むしり、茶つみ、麦刈、いも堀等
- ・その他…薪背負い、桑の皮むき、茶の実やど
どんぐり拾い、ラッパ鼓笛隊（出征
兵士の駅頭見送り等）、野草の採集等



（あきる野コラム）

私の戦争体験

玉利 達夫

あきる野市の広報を見たら、戦争の経験のある人は体験談を書いてほしいとの記事がありましたので、当時のことを思い出して書いてみることにしました。

私は、今の中学三年生と同じ年齢で昔の海軍特別志願兵として入隊しましたが、最初は長崎の佐世保市にあった相浦海兵団で約十か月、特別教育を受け、次は神奈川県厚木航空隊（今の米軍が使用しているところ）で約三か月、戦闘機の機体整備の教育を受け、最後、長崎の大村海軍航空隊に移されました。今の長崎空港です。

しかし、今の空港みたいに貧弱な空港ではなく、まことに立派な空港でした。主に、戦闘機部隊の基地で昔の零戦、月光（夜間戦闘機）、紫電（当時の最新の戦闘機）等がいました。私は月光の整備担当で毎晩飛行場近くの仮宿舎で寝泊りしていました。ここで私の人生の中で一番、そしてはつきりと頭の中に残っている戦争体験があります。これを中心に書いてみます。

毎年八月になると必ずテレビ新聞等で賑わす事柄があります。それは皆さん方も良くご承知のように八月六日は広島、八月九日は長崎と、米軍により原爆が投下された日です。戦後七十三年ともなれば、この爆発の状況を実際に見たり体験した人は少ないのではないのでしょうか。私が実際に見た状況を良く思い出しながら書いてみます。

当日は薄曇りで太陽の弱い光が差していたと記憶しております。私は飛行場で夜間戦闘機、月光のエンジンを整備中でした。確か、午前十一時過ぎだったと思いますが、その時ものすごく強い閃光が来ました。何の光だろうと思っていると今度は大きな爆発音が聞こえてきたのでどこか近くは長崎市の上空に今まで見たことのない奇妙な渦雲（きのこ雲）が現れ、もくもくと渦を巻きながら上昇し、最後は薄雲の中に消えていきました。きのこ雲の中は赤色と黄色の混色みたいな色で、表現は悪いかもしれませんが、まことに見ごたえある誰でもびっくりするようなものでした。その後約三十分位したときに、長崎市に原爆が投下されたとの情報が入り、あれが原爆かとはじめて知ったような状況でした。

しかし、実際に住民の悲惨さを見かけたのは翌日からでした。普通のトラックに女性・子どもを含む多くの人が乗せられ、私のいた大村の海軍病院のほうに連れてこられました。当時は包帯やガーゼ等が不足していたのでしょうか、頭や顔などに油紙のような物をべたべたと貼っていたように見えました。この人たちは、その後どうなったのか分かりませんが、火傷や放射能等のために多くの人が死亡したのではないのでしょうか。

また、私がいた大村の航空隊でも沖縄が米軍に占領された後は、多くの特攻隊員を見送りました。若い隊員たちが、古い戦闘機に乗り死を覚悟で飛び立っていきました。沖縄が取られた後は、毎日毎晩のように敵機に襲われて飛行場に大きな穴ができ、これを埋めるのに大変でした。三日三

晩ほとんど寝ないで頑張ったことを思い出します。

また、米軍の爆撃でかなりの隊員が戦死したのも事実です。私も日時は忘れましたが、空襲を受け爆弾の破片が頭をかすり、負傷したことがあります。このとき、近くにいた部下三人が死亡しました。私ももう少し頭を上げていたら、部下と同時に死んでいたと思います。そのときです。近くの建物で火の手が上がりました。死んだ部下の身体まで燃えては大変と思い、死体の腰のバンド辺りをつかまえて運びましたが、途中で頭の骨が割れて、脳が落下してしまいました。

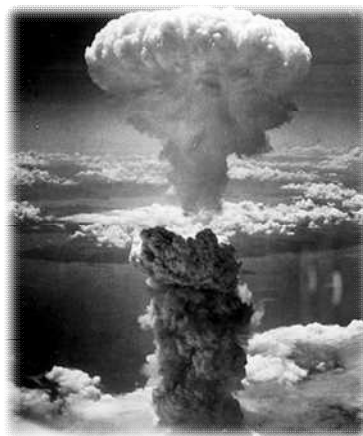
今思えば、戦争は何とまことにむごたらしいものです。相手を倒さないと自分が倒されるのですからね。このようなことを考えると人間という動物は相手を自分の支配下に置こうという心が強すぎるのでしょうか。

最後に参考として書いてみたいと思います。原爆の威力についてですが、現在の高性能爆薬に換算した場合、広島及び長崎型の原爆は、約二万トンのようです。しかし、現在の原爆（水爆）はなんと数メガトン、一メガトンは約百万トンですから、いかに大きな物かが見当つきます。仮に五メガトンとした場合、広島または長崎の約二百五十倍になります。これ一発で東京二十三区は直接の爆発の被害と後の放射能の被害等でほとんど全滅のおそれが考えられます。北朝鮮が核兵器にこだわるのも分かるような気がしますね。新聞か雑誌がよく覚えていませんが、万が一、本格的な核戦争が始まると世界の全人類を七回繰り返し殺傷するくらいの核兵器が各国に存在するようなことを書いてあったのを覚えています。

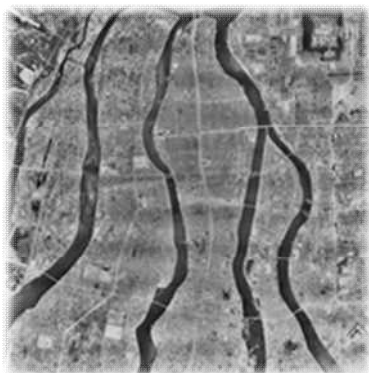
皆さん方も戦争について良く考えてみてください。せめて日本はどんなことがあっても戦争等しないよう努力しましょうね。



原爆前 (1945/07/25) の広島
出典:国土地理院地理空間情報ライブラリー



長崎に落とされた原子爆弾



原爆後 (1945/08/11) の広島
出典:国土地理院地理空間情報ライブラリー

罹災

宮田 俊雄

昭和二十(1945)年二月十九日。

たまたまその日は、私が国民学校の新生の身体検査を受ける日だった。母と祖母に付き添われて学校に向かったが、着くとすぐ警戒警報(付記一)のサイレンが鳴り渡り、受付にいた先生に直ちに帰宅するように言われた。

三人が途中まで引き返して来ると馬の手綱を曳く軽部さんに出会った。空襲のため早仕舞いで仕事を切り上げて来たらしく馬車の荷台には、何も積まれていなかった。

父の出征した後の我が家は、母が取り仕切って、近くにあった軍需品工場の大日本工業株式会社で作った軍用機の部品を二台の馬車を使って運搬し、生計を立てていた。軽部さんは馬方の一人だった。

彼は足弱な三人を空の馬車に乗せると、馬を駆り立てて道を急いだ。しかし、一行が家に着く前に空襲を告げるサイレンの断続音が鳴りだしてしまった。三人が馬車を降りた時には、もう、B-29の最初の編隊が頭上にさしかかっていた。お花茶屋にあった高射砲陣地からしきりに砲弾が打ち上げられ、空で炸裂している。家の中に入って着替える暇はない。そのまま大急ぎで防空壕に飛び込んだ。壕の中で息を殺してB-29の編隊の通過を待ったが、その日は、はじめからいつもと様子が違っていた。そのうちに近所のTさんの家に寄宿していた数人の男達がどやどやと我が家

の防空壕の中になだれ込んで来た。B-29の投下した焼夷弾が落ちてきたのだ。身の危険を感じた彼等はパニックに陥り、中にいる女子供のことなど思い遣る余裕はない。上から折り重なってきて、中にいた子供たちは押し潰されうになってしまった。

防空壕に避難した後の出来事は、男たちがなだれ込んで来て、潰されそうになったことと、頭から布団をかぶって小さくなっていたこと以外は覚えていない。ただ、祖母に手を引かれて外に出た時、壕の入り口の正面にあった爆風よけの土を入れた土囊の板囲いが燻りはじめていたのだけは、はっきり覚えていてる。

壕から出ると、壕のすぐ前にあるTさんの家が炎に包まれているのが見えたが、我が家には火の手は上がっていなかった。

しかし、それは束の間のことと、すぐ薄煙が軒下に這い出して来て、見る間に濃密な白煙に変わっていった。「焼け跡を調べたら、三十二個(だったか三十六個)の焼夷弾の燃え殻があった」と母が話すのを聞いたことがある。

しばらくは煙だけで、炎の影は見えなかったが、そのうちに窓ガラスを突き破って、煙混じりの炎が噴き出してきた。出征した父はその時は、神戸で兵役に就いていたので大人は母と祖母の二人だけ、幼い子供四人を抱えて消火などとは思っても及ばなかった。そこにじっとしていれば家と一緒に焼け死んでしまう。それから一家の逃避行が始まったが、それは惨憺たるものだった。炎と煙が渦になって押し寄せて来る。火の粉に混じって空に吹き上げられた板切れが燃えながら落ちてくる、焼けトタンも飛んで来る。こ

れから身を守るために防空壕の中にあつた布団を持ち出して、母と祖母が頭の上に広げ、子供達はその下に身を隠して隣にあつた農家の庭に逃れた。煎餅屋もやっていたその家は敷地が広く、焼く前の煎餅の生地の手し場に使用していた前庭の隅に大きな防空壕があつた。火と煙を避けるため、その中に逃げ込もうとしたが、ここも安全ではなかつた。近くにあつた農家の家作が炎に包まれ、壕のある方へ倒れかかってきたのだ。

最後に逃げ込んだのは竹垣で道路と仕切られた畑だつた。母と祖母が力を合わせて垣を破つて中へ入り込んだが、母は、その時のことを思い出し、あれだけ丈夫に出来ていた垣根をよく素手で壊せたものだ、一心とは恐ろしいと語っていた。その時は、折悪しく下肥（しもごえ、付記二）を撒いた直後だったが、逃げ込んだ時は夢中だったので誰もそれに気がつかなかった。

履物を履く暇がなかったので皆、足袋裸足で逃げ回っていた。火勢が衰え、火に焼かれる恐れがなくなつて、ほつと一息ついた時、異臭に気がついた。足袋を履いただけの足は糞尿混じりの土にまみれ、異臭を放っている。惨めなこと夥しい。

もちろん、家財を取り出す暇などあろう筈はない。一切合財が家と共に灰になってしまった。男手が足りず、馬方が雇えなかつたため仕事に出られずに厩にいた馬が一頭焼け死に、庭先に停めてあつた二台の荷馬車までもが綺麗に燃えてしまった。

その頃の東京はよく雪が降り、二、三十センチ積もるのは珍しいことではなかつた。空襲の後にも、大雪が降つて

焼け跡を覆い尽くした。片付けられないまま、横たわっていた馬の焼死体の上にも雪は降り積もつた。野犬が焼け死んだ馬の所在を嗅ぎつけて集まって来た。いくら追つても飢えた野犬は、すぐに戻つて来る。・・・馬の死肉を貪る野犬の群。真つ白な雪とそれを染める真つ赤な血の色。今でも忘れることが出来ない地獄絵さながらの凄惨な光景だつた。

（付記一） 警戒警報、空襲警報

空襲のある時は、ラジオ放送やサイレンの音で市民に知らせていた。警戒警報が連続音で、空襲警報が断続音だったと記憶している。

尚、空襲警報は、空襲が確実視された時に発令された。「トウブグンカンク」とか「ヨコチンナカカンク、クウシユウケイホウハツレイ」などと言うラジオから漏れて来た言葉の記憶がある。漢字で書けば、前者は「東部軍管区」後者は「横鎮中管区空襲警報発令」となり、ヨコチンナカカンクは、横須賀鎮守府中部軍管区の略ではないかと思う。

（付記二） 下肥

昔は人の糞尿Ⅱ下肥を田圃や畑に撒いて肥料にしていた。普通は作物を傷めないため、水で薄めて使うが、寒肥と言つて作物を作らない冬場にそのまま撒いて土に馴染ませることもあつた。

私の一家は生の糞尿にまみれてしまったわけだ。

戦時下の市民の暮らし

昭和6年に起こった満州事変をきっかけに、日中戦争・第二次世界大戦・太平洋戦争と日本は一路軍国主義への道を歩み、国内体制も「国民精神総動員運動」のもと「国家総動員令」が出され、「国民徴用令」も発動され、婦人も学生・生徒も工場へ動員され、戦局の悪化に伴い学徒出陣となり、国民すべてが戦争に参加するようになっていきました。

働き盛りの青壮年の多くが戦場に駆り出されたため、家を護ることは女性の肩に重くのしかかりました。「国防は台所から」というスローガンをもとに国防婦人会や愛国婦人会（後に、大日本婦人会に統合）が割烹着に白エプロンのまま街頭に繰り出し、出征兵士の見送りや傷病兵や遺骨の出迎え、留守家族の支援などを行いました。特に、防空演習では、女性が前に立って活動しました。

【防空体制】実質的意義は戦時中の「意識高揚」でした。

①防空壕を掘り、防火水槽・梯子・火叩き・消火用バケツ等の常備 ②土蔵その他一切の白壁は暗色に塗る
③夜間の燈火管制 ④男子は戦鬨帽、ゲートル姿、女子は防空頭巾、モンペ着用、胸には住所氏名・血液型等を記した布片を付ける ⑤緊急用品・食料等確保 などが主なものでした。

（あきる野コラム）



東京大空襲

宮田 俊雄

東京大空襲に先立つ昭和十九年（1944年）二月十九日、我が家はB-29の落とした焼夷弾で家と家財道具のすべてを焼き払われてしまった。

三月十日の東京大空襲を目撃したのは、葛飾区立石にあった知り合いの材木商の家に身を寄せている時だった。そこは爆撃を受けた下町の本所や深川から少し離れていたため、直接の被害は受けなかったが、赤黒く染まった東京の空と手の届くほどの低空を飛ぶB-29の姿を目撃できた。これまでの空襲はいつも昼間で、日本の戦闘機と高射砲の攻撃を避けるために高高度を飛んでいたB-29は縫い針よりも小さく見えた。しかし、夜間の空襲だったこの時は、超低空を飛んだので驚くほど大きく見え、地上で燃え狂う猛火の照り返しで銀色の機体は赤く染め上げられていた。焼夷弾の雨を降らせるB-29を目がけて照射される探照灯（サーチライト）の光芒が闇を切り裂き、その一つに捉えられた巨体に幾つもの光芒が集まってくる。

光を浴びて銀色に輝く機体に向かって火を吐く地上の高射砲陣地と闇に紛れて肉薄する日本の夜間戦闘機。光の束に目がくらんで、にわか盲になったB-29の搭乗員には近づいてくる日本の戦闘機は見えなかったに違いない。体当たりを目撃したのはこの夜だった。

探照灯の光にあぶり出されたB-29と攻撃する日本の戦

闘機を結んでいる曳航弾の流れがどんどん短くなっていく。戦闘機が射撃しながら体当たりを敢行しようと肉薄しているのだ。見ていた誰かが、「アッ、体当たりだ！」と叫ぶ。闇を飛ぶ日本の戦闘機の姿はよく見えなかったが、B-29の機体の側面に丸い火の玉ができて、そのまま石のように真つ直ぐ落ちていった。火の玉は、体当たりをした日本の戦闘機の燃える炎だった。痛手を受けたB-29は、煙の尾を引きながら次第に高度を下げていったが、その場では落ちずに東へ向かって飛び続けた。

大本営発表では、「撃墜十五機、損害を与へたるもの約五十機」となっているが、そのうちの一機は体当たりされたあのB-29に違いない。

（東京大空襲メモ）

戦後の日本人たちが放棄してしまったアメリカ人たちの犯した類例のない戦争犯罪の追及と告発。…空襲で亡くなり物の言えなくなってしまった犠牲者に代わって彼らの蛮行を断罪するのは、生き残った戦争体験者の義務と心得、一筆したためた。

指揮官のヘイウッド・ハンセル准将は、反撃する術を持たない無力な非戦闘員である一般市民を巻き込む無差別爆撃は、非人道的だと考えていた。

そのため、B-29による初期の空襲はレーダーを使った高高度からの軍事施設や工場へ向けての精密爆撃だった。

しかし、精密爆撃とは言いながら、まだ、レーダーの性能が十分でなかった上、偏西風に乗ったB-29は、爆撃目

標の上を一瞬のうちに飛び抜けてしまい、思うような効果を上げられなかった。

業を煮やした米軍首脳は、あくまで人道主義を貫こうとするハンセル准将を更迭し、代わりにドイツ爆撃で戦功のあったカーチス・ルメイ少将を司令官に任命した。彼の指揮で行われた東京大空襲は、焼夷弾による無差別絨毯爆撃で、狙いは木造家屋が密集する下町に散在している町工場を住民もろとも焼き払うことにあった。

この爆撃について、アメリカ人たちは「日本では大企業や中小企業だけでなく下町の零細企業も軍需産業の生産拠点となっているので戦力を削ぐためには、ここの爆撃が欠かせなかった。」とその正当性を主張している。

三月十日に出撃したのは戦略爆撃部隊の第七十三、第三百十三、第三百十四の三個航空団だったが、合わせて三百二十五機ものB-29が出撃した。

作戦は周到で、延焼効果を高めるため、気象を予測して強風の吹き荒れる日を選んで実施された。米軍の狙いは的中し、爆撃による火災の煙は高度一万五千メートルの成層圏にまで達し、秒速百メートル以上という竜巻並みの上昇気流が東京の空を吹き荒れた。

町はたちまち火の海となり、逃げ場を失った人々を炎が襲った。猛火から放射される熱線を受けて火の粉を浴びなくても髪の毛や衣服が自然に燃えだす人がいた。火災に酸素を奪われて窒息死する人がいた。熱さに耐えかねて近くの川に飛び込んで溺れ死んだ人がいた。

この空襲で一夜にして十万人以上の人が命を奪われた。数え切れないほどの無辜の民が生きながらにして火に炙ら

れ悶え苦しみながら死んでいったのだ。

かつての人類史上のどの時代にも見られなかった大量虐殺。言葉では言い尽くせない米軍の蛮行だった。

人の世に争いは絶えない。古来、戦いにより多くの国が興り、多くの国が滅んでいった。人類の歴史は戦争の歴史ともいえる。国や民族の興亡をかけた戦争には、いずれが正で、いずれが邪であるか裁きをつけ難いものがある。しかし、いつの世でも力が正義となる。

歴史は勝者の立場で書かれ、勝てば官軍、負ければ賊軍、敗者は悪者にされてしまうのが世の常だ。

日本軍の重慶爆撃は無差別爆撃として世界中から非難を浴びているが、アメリカ軍による東京大空襲が国際的な指弾を受けたと聞いたことはない。

それどころか、瞬時に二十三人余の人々を地上から抹殺してしまった広島、長崎への原爆投下すら正当化され、世界はそれを是認し、アメリカ人の人道を踏み外した暴挙は裁かれることはなかった。たぶん、今後もないだろう。

資料により多少の差異はあるが、9.11テロの死者は、すべておよそ三千人とされている。アメリカ人たちは、この被害に集団ヒステリーを起こし、報復を誓い合った。

彼らは、人命は尊く、数が問題ではないと言うだろう。

繰り返しになるが、広島では瞬時に十二万人、長崎では、七万人、東京大空襲では一夜に十二万四千四百人が亡くなっている。まるで桁が違う。その上、原爆は放射能による被害をもたらし、被爆後の五年で広島市の死者は二十万人に、長崎の死者は十四万人に膨れ上がっている。そればかりではない。未だに後遺症に苦しんでいる人がいるし、被爆二

世もいる。

もし、これがアメリカだったら、彼らは何というだろう。日本軍の重慶爆撃も同罪だが、手向かう術を持たない無力な一般市民を標的とした米軍の東京大空襲や広島・長崎への原爆投下は間違いなく戦争犯罪行為、等しく断罪されなければならない。

東京空襲

昭和19年11月14日を皮切りに、以後終戦まで東京は106回の空襲を受けました。アメリカ軍の大規模な無差別爆撃により多くの死者が出ました。特に、昭和20年3月10日が最大規模であることからこの空襲を「東京大空襲」と言います。この空襲は2千メートル程度の低空から深夜に攻撃する、また、爆発の破壊力よりも燃焼力に特化した焼夷弾の使用、さらに延焼効果の高い強風の日を狙ったことなどから常識をはるかに上回る火災が起き、まちの至る所で火災旋風が発生し、通りは火の粉の川と化しました。火災の煙は高度1万5千メートルの成層圏にまで達し、火山の大噴火を思わせるほどだったと言われています。熱く逃げ込んだ川でさえ燃える川であったり、厳しい寒さのため凍死する人も多くいました。

午前0時からの約2時間で325機のB-29爆撃機が飛来し、38万発、1783トンの爆弾を投下したことになり、この結果、10万人以上の死者が出ました。単独の空襲による犠牲者数は世界最大であると言われています。

東京都は、「平和は都民の願いである」とし、戦争の惨禍を再び繰り返さないことを誓い、3月10日を「東京都平和の日」と定めています。



秋川の昔の話（秋川市教育委員会 平成4年12月25日発行）

1 できごと（27頁から31頁まで）

16 空 襲 昭和20年4月3日夜間に爆撃、6発、炸裂しなかった4発の不発弾は戦後、昭和49年に処理された。7月30日に投下あり、1名死亡、民家2軒半壊、2軒破損した。

17 空中戦 昭和20年2月ごろ、秋川の上空で空中戦、日本の陸軍戦闘機が落下

昭和20年1月、B-29に陸軍戦闘機が体当たりし翼がこわれて落ちてきた。ちっちゃな戦闘機が、でっかいB-29の方向舵に体当たりした。果敢で壮絶だった。

18 玉音放送 「戦争に敗けたことが分かり、全身の力が抜けていくのを感じた。虚脱状態と言ってたが、なかなか立直れなかった。日本人みんなそうだったと思うよ。」「秋川に着いたときは本当によかった。やれやれというだけ、それだけだった。」「国敗れて山河あり」この言葉のとおりだ。」

2 くらし（86頁から98頁まで）

24 青年団活動 草花、引田、二宮の青年団活動、「団員が入営したり、応召して出征していく度毎、お宮で祈願し、歩いて福生駅まで見送りに行った。」「陸軍病院に傷病兵の慰問に行ったり、戦死者の出迎えや村葬に参加したりした。」「日本の運命とともに、その一翼を担った。」

25 処女会 二宮の処女会（女子青年団の前身）の活動、「蚕の一枚飼育」、「雑巾さし」、「戦艦三笠の見学」など

26 消防団 消防団（戦時中「警防団」）の活動、「空襲警報が発令されると、鉄兜の緒をしめて、メガホンで町内を駆けめぐって、退避を指示した。」

27 戦時下の生活 戦時中の防空演習や空襲警報発令時の様子

28 食糧難 終戦の年と翌年5月までの食糧不足について、「秋川も米の産地ではないから、栄養失調の人が出た。」「配給だけでは足りなくて、ヤミ米を買って生き延びた時代、ヤミは違法と配給だけで通した裁判官が、餓死した程のひどい食料難だった。」

先の世界大戦を顧みて

橋詰 勝茂

昭和二十年三月十日その日は東京の空は米軍の戦闘機による攻撃を受けて、火の海と化した日でした。東京大空襲の日でした。

当時、私は、東京千代田区（現在の御茶ノ水駅）近く神田明神の隣に住んでおりました。

爆撃は夜半になり、いつ果てることもなく、いつそう激しくなってきました。爆撃は時間とともに激しくなり、空は昼間のように照明弾のため明るくなり爆撃は止むことがありませんでした。家は焼かれ近くは火の海と化して、着の身着のまま避難をしなくてはなりません。第一の避難場所は聖橋の下（現在の東京医科歯科大学）の所に近所の人たちと避難をしました。その場所も時間とともに火の海で、ますますひどくなってきましたので、次の避難場所を探して駿河台にある明治大学に場所を変えて一夜を明かすことができました。

翌日空襲がやみましたので、家のあとに行くことができただけで行くと一面の焼け野原でした。後で聞いた話では、近くで多くの人たちが犠牲になり亡くなっているということでした。また、本所の方面（現在の領国）では何十万人もの人たちが犠牲になって亡くなっているということでした。

子どもながら非常に悲しく、戦争というものは非常に残

忍な行為であると思いました。

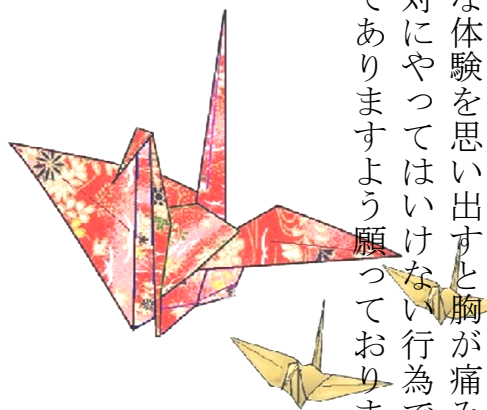
私たちは親類を頼って、避難場所を探さねばなりません。長くは世話になれず、私と母は、母の実家のある新潟に行くことになりました。

三月の新潟は雪があり、雪を知らない私には非常に大変な思いがいたしました。

昭和二十年八月に終戦を迎えたので東京に帰ることにしましたが、すぐに帰るところがありません。当時、伯父が立川飛行機にいたので叔父を頼って立川に住むことになりました。

当時の立川は米軍に接收されており、町は軍人であふれており、私たち子どもは軍人にチョコレート、チューインガム等お菓子をねだる毎日でした。毎日食べるものがない時代でしたので、仕方ありません。そういう生活が続き、その後何十年か後に、基地が完全に返還されて、時代も移り変わり今日の繁栄には驚いております。

最近、新聞、テレビ等で朝鮮半島での無責任な行為が行われております。もうこのようなことは、私たちの時代で終わりにしてほしいものです。戦後七十二年たった今も私たち戦争体験者は当時の悲惨な体験を思い出すと胸が痛みます。次の世代には戦争は絶対にやってはいけない行為です。いつまでも全世界が平和でありますようお願いしております。



終戦の日

影山 花子

終戦の年、私は二十三歳。千代田区永田町の内務省大政翼賛会で、昭和十七年からタイピストとして働いていました。

昭和二十年八月十五日、早朝の六時頃だっただろうか、通勤の為、増戸駅へ向かう途中のことでした。近くの校舎に駐屯している兵隊さんたちが、「空襲だ」と言って、我先にパラパラと近くの桑畑の中へ駆け込んでいった。私は一瞬咄然として、何か違和感というか、複雑な気持ちに襲われました。目の前に、か弱い乙女子が歩いているのに「逃げなさい。」とも声をかけないで。私は不安ながらも、あまり怖さを感じなかった。それは、あの不気味な空襲警報のサイレンが鳴ったとは思わなかったからで、確かにサイレンは鳴らなかった。不審に思いながらも、とにかく夢中で駅へと急いだ。何事もなく無事に駅について、ホッと胸を撫で下ろす思いでした。

ところが、今度は都心に向かう省線電車の中で、二度も空襲ということで降ろされてしまった。千駄ヶ谷と信濃町駅辺りだったと思う。「空襲です、降りてください。」という駅員の声に、夢中で、どのように線路まで降りたのかわからなかった。コンクリートの塀にぴたりと身を寄せて、今度ばかりは恐ろしさで心細さで、生きた心地もなかった。解除までの長い長い時間、どの位の時間だったのか、とて

も長い時間に感じられた。でもこのときも何事もなく過ぎ去ったようだった。

有楽町の駅に着いたのが正午近く、改札口を出たら毎日新聞社の（現在位置と違っています。）のテラスから拡声器の声が流れている。「玉音放送がありますから」というような言葉が耳に入った。私は思わず立ち止まり、直立不動の姿勢になり耳を傾けた。辺りは人影も疎らに繁華街の有楽町も戦争中は流石にさびしい、私を交えて四、五人位だったろうか。御詔勅のお言葉は難しく、私にはどのような事なのか少しも判らなかった。唯、『堪え難きを絶え、忍び難きをしのび』というようなお言葉だけが耳に残った。不安の入り交じった気持ちで職場へと急ぐ。私たちの職場（内務省の移動していた事務所）も二度の空襲に見舞われ、焼け残った一角で仕事をしているような状態でした。文化国の哀れさ、電気、ガスは途絶え、水道の水は瓦礫の間よりほとばしり出ているという有様。わけても情けないのは水洗便所、何しろ惨憺たるものでした。

すでに解散された職場には、十二、三人の職員が残務整理に残っているだけです。ラジオもなく、玉音放送のことを知っている人はいませんでした。私は遅刻の弁解やら、玉音放送を聞いたことを伝えました。「敗けて、戦争も終わリだね。」と、皆さん大変冷静でした。ああやっぱりと思いつつ、こんなに痛めつけられ、傷ついても、敗けたなんて思いたくなかった。

帰りに当日お休みの上司のお家に用事を頼まれて伺う。「不味いことになったね。」と部長さんが言われた「はいそうですね。」と思わず答えてしまった。「良く判らないので

す。」というのがきまり悪かった。「どうなったのでしょうか。」とお聞きしたかったけれど、知るのが恐かった。

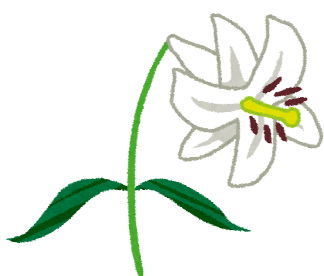
帰りの電車の中で、人の新聞を覗き見る「無条件降伏」という文字が目飛び込む「エッ」と愕然としてしまった。ああ、何という屈辱的な言葉なんだろう、と胸がドキドキしてしまった。誰やらが「名実ともにアメリカが世界一だ。」と呟くように言っていた。ほんとに子供の頃から、日本は小さい国だけれど、米・英と肩を並べて、世界の強国なんだと、誇りに思っていたのに、もう劣等国に落ちてしまう、何かそんなことまでが、たまらなく悲しく思えた。

翌日、真夏の都心の空に、アメリカの飛行機が意気揚々と飛んでいる。空なんか見たくない、見るものかと口惜しくて、口惜しくて仕方がなかった。仕事も手につかず、友と三人、誰いうともなしに宮城へと足を向けた。玉砂利を一步踏みしめて、フツと、天皇陛下の御心は、到底私達の計り知れない御心労の御ことでありましよう、と思った途端、どつと涙があふれ出て、声を出して泣き出してしまった。友も一緒に泣き出した。みんなつらい、苦しい日々だった。圧迫感、緊張感、何やらがどつと崩れて涙と共に流されてゆくようでした。三人寄りそい、泣きながら二重橋の前まで行くと、他に平状して泣いている人、宮城に手を合わせて泣いている人、詩を吟じ慨嘆している人、様々でした。私達も手を合わせながら、何時までも何時までも去りがたい思いで立ちつくしていました。これから先、どうなるのかしらという不安がまた重くのしかかり、心も暗く不安でした。でも天皇陛下がおいでになるといふことがどれだけ心の支えになったことでしょうか。今どき、笑われ

るような気がしますけれども、その時は真実そう思いました。

四十年後の去る日、独り二重橋の前に佇んで、若くしてお国の柱となって戦場に散った同年代の人達、三月十日の空襲に炎の中に消えていった友の事など、様々に思いを馳せながら、当時のことが走馬燈のように脳裏をかすめていきました。皇居に手を合わせながら感慨無量でいっぱいでした。

あの焼け跡には、高層建築物が林立し、昔を偲ぶすかもなく、唯一ビルの谷間に法曹会館が懐かしい姿をとどめていました。そしてもう一つ、トイレに困り日比谷公園を通り抜け飛び込んだ三信ビル、昔のままに天井にシャンデリアが輝いていた、その後、建て替えられたと知人より聞き寂しい。巨大な東京、それは又日本が世界の経済大国として栄えつつある姿を物語っているかのようでした。



戦争体験談

影山 保

機銃掃射と防空壕

昭和二十年、終戦の年、私は小学校一年生。夏休み中に忘れることのできない二つの恐ろしい出来事に遭遇した。一つは「機銃掃射と防空壕」のことだ。

昭和二十年七月二十八日昼すぎ、家で遊んでいた時のこと、空襲警報が鳴り、父親と兄弟たちは庭に作られた防空壕に避難した。当時、引田あたりの農家では、どこの家でも庭先に、家族みんなが避難できるぐらいの大きな防空壕を作っていた。私の母は、警報が鳴っても、押入れの布団の中が一番安心と言って、暗い壕にはあまり来なかった。

その日の空襲はなかなか敵機の襲来がなく、もう終わりがなと思ったとたん、バリバリというものすごい大音響とともに敵機が急降下、やがて轟音とともに敵機は通り過ぎていった。その時、母親が縁側からバタバタと血相を変え、はだして防空壕に飛び込んできた。居合わせた全員も顔面蒼白、恐ろしさに震える思いだったことを忘れることはできない。

その日の機銃掃射で、わが家から百メートルぐらい南にあった学童疎開宿舎「海老沢寮」が銃撃を受け、五年生の男の子が犠牲になった。頭蓋骨貫通、脳みそは飛散し、床一面と天井にまで張り付いていたと聞かされた。戦争中一番怖い思いをした日だった。（詳細は秋川市史1216ページ）

八王子空襲と焼夷弾

もう一つの恐ろしい記憶は、「八王子空襲と焼夷弾」だ。昭和二十年八月二日未明、八王子市を襲う二時間にもおよぶ空襲があった。B-29爆撃機百七十機が飛来し、市街中心部の八割、千七百戸が消滅した。死者四百五十人、負傷者二千人以上を出す大空襲だった。

私は小学校一年生の夏休み中、何か外が騒がしいので起床し庭先に出た。戸吹の南側が八王子市内だ、焼夷弾の炎で空が真っ赤に染まっている。それだけでも恐ろしかったが、もつとびっくりしたのは、赤く染まった炎の中に、雨のように降ってくる焼夷弾の形まではっきり見えたことだった。戦争はほんとに恐ろしいと思った。子供心に映ったあの光景は今でも忘れられない。



写真提供…影山氏

空襲の二日後に撮られた焼け野原となった市街地

（八王子市戦争と平和展会場で）

秋川市史

(秋川市史編纂委員会 昭和58年11月3日発行)

近代

兵制と戦争 (118頁から1218頁まで)

本項では、江戸時代末期の兵制のはじまりから紹介し、戊辰戦争、西南戦争、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、15年戦争(日中戦争、第二次世界大戦、太平洋戦争)での秋川市の動きを記している。

(太平洋戦争に関するこの項目) (1193頁以降)

・秋川市の太平洋戦争における戦没者

・二宮地区から征った兵士たち

・太平洋戦争末期、南方作戦に向かう兵士の体験

・敗戦間近の入隊 ― 無装備の兵士たち

・沖縄本島守備兵最後の状況

・敗戦を知らず残された日本兵

・秋川市の戦災 ― 五日市線列車襲撃事件を中心に

↳ 「空襲された五日市線に乗っていた私(中島元利著)」の状況が詳しく書かれている。

「(二宮)倶楽部の床に並べられた怪我人の数は15、16人と言われている。石榴のように裂けた肩、太もも、銃弾で鼻先をとばされた学生、胸から血を流している中年婦人等々、床は血の海だった。」

・集団学童疎開の受け入れ

・集団疎开学童の死(海老沢寮銃撃事件)

↳ 「戦争体験談(影山保著)」にある状況が詳しく書かれている。

「子どもたちを戦火から守ろうと親元から引き離して、農村地帯に疎開させた訳だが、その疎開先でこうした犠牲者が出たことは一つの悲しい戦争の記憶である。」

戦争体験

田野倉 清

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まった。連戦連勝のニュースを信じ、国民総動員体制が強制された。小学生だった私たちは運動場の一角に設けられた「奉安殿」に対して、登下校の際、最敬礼が当然で、日々、軍国主義が高まることを小学生でも感じていた。休校日には運動場を利用して地元の青年が集められ「退役軍人」から教練される姿を見て、それが格好良く、早く大人になりたいと軍人になることが将来の「夢」だった。

戦争初期、日本優勢であったが、十七年後半から圧倒的な物量の違いから劣勢となり、そして敗戦へと進んだのである。しかし、「軍事情報」は、日本軍が連合軍を圧倒している」と毎日紙面を賑わしていた。国民は、それを信じ「銃後の守り」に一生懸命であった。

「銃弾」を作るんだと言って鍋や釜の供出を強制されたり、「松根油」で航空燃料を作るんだと言って、各家庭の庭木である「松」の供出を強制されたが、戦争に役に立つためならと積極的に応じたのである。我が家の庭にも大きな松があるが、今でも健在だが、格好良いからと持っていかなかったらしい：とは後で聞いた話である。

日本は「神の国」であり必ず戦争に勝つと国民は信じていた。

体験1 動員

旧制中学二年のとき、昭和飛行機へ動員する。敵機来襲、工場内にサイレンが鳴り響く。全員、工場外へ退避命令。多くの人は桑畑の先にある神社の森へ走って逃げた。私は友人と枝を刈り取ったばかりで、裸の桑に寄り添って弁当を食べていた。その時である。米戦闘機P-51から機銃掃射を受けたのである。弾丸は私の脇、数十メートル先に土煙を立てた。そのとき、友人は、「おかあちゃん」と叫び、私は「こわい」と桑の木にかじりついたことを今でも鮮明に思い出すのである。弁当はひっくり返り、半分、土を被った。飛び去る戦闘機を見上げた。操縦士の顔が「はつきり」と見えた。その顔は「にやにや」と笑いながら掃射したのである。犠牲者がなかったのが幸いであった。

体験2 空襲

戦争も中盤から後半へと進む。軍管区情報は、「わが軍は連戦連勝しておる。国民一層の奮励努力せよ」の情報が紙面を飾る。そして、銃後では家庭の主婦が「本土決戦」に備えて「竹槍」の訓練を日課としていた。国防婦人会も結成され、白い割烹着をスローガンにして、全国決起大会も開催、全国的な動きを見せた。そして「欲しがりません、勝つまでは」が合言葉になり、子どもたちも我慢を強いられた。夏休みの午後、中学生の私は縁側でごろ寝をしていた。突然、地鳴りのような爆音が聞こえた。爆撃機B-29十数機が東方へ向かっている。突然、日本の戦闘機が襲い掛かって攻撃したのである。交戦状態は「火花」が走るのによく分かった。多勢に無勢。火を噴いた日本機は真逆

さまに落ちた。と、突然、我が家に向かってきた。目の前に機首を見たとき、私は、怖さを通り越して棒立ちになった。火は消えていた。機は、黒い煙に包まれながら、よろした状態で東方へ向かった。横田飛行場へ向かったと思ったが、帰れるか、とても心配だった。



釣鐘供出 (出典：五日市の百年)

物資統制

【配給】太平洋戦争に突入以降、米麦をはじめ衣料・燃料等の生活必需品、さらに調味料・酒・煙草等の嗜好品に至るまで、日常生活上のあらゆる物資が配給制となりました。実質的に、国民生活のすべてが政府の統制下に、強制的に管理されました。

【供出】一方、供出も義務付けられました。

米や麦、甘藷、馬鈴薯等の農作物のほか、薪炭等の供出がありました。旧秋川地区では、米について政府割当の2倍を供出するなど、よくその使命に応えました。旧五日市地区では、特に薪の供出が厳しく、二把掛けと称して普通小束の倍量のものでした。そのほか、「松根油」(航空機燃料に混合すると称したが実用化には至らなかった。)の原料として、松・杉・檜等の古根株の供出割当もあり、各家庭を挙げて山野を歩き、探し求めては掘り起こしました。「三多摩の松根油増産に多西村でも二基の乾溜釜を構築、採集を行う。百貫(375kg)の根で約三斗(54ℓ)の油(読売新聞 昭和20年1月12日号)」そのほか軍需用金属の不足を補うため各家庭の不要金属製品の供出(金属回収運動)があり、古やかん・古釜・蚊帳の吊り手・学生服の金ボタンまで提供させられました。

寺院でもこの機運に従い、釣鐘(梵鐘)の供出に踏み切りました。寺院としては断腸の思いであったことでしょう。

(あきる野コラム)



空襲された五日市線に乗っていた私

中島 元利

終戦の一か月前、昭和二十年（1945年）のある日、私は立川からの学校の帰り、友人と五日市線の列車に乗っていた。列車が多摩川の鉄橋にさしかかり、半ば過ぎた頃だった。突然、耳をつんざく轟音とともに飛行機が超低空で、川上のほうから列車に向かって迫ってくるのが目に入った。と、その瞬間、バリバリとすさまじい音がして、赤黄白の光の矢が目の前を飛びかった。悲鳴が上がった。「機銃掃射だ、伏せろ。」と叫ぶ声にあわてて床に伏せた。P-51戦闘機は何回も上からの攻撃を繰り返す。

やがて爆音は消え、誰かの叫び声でふと我に返った。「機関車がやられたぞ。早く避難しろ。」という声に、乗客は先を争って列車のデッキから降りている。避難が最後になった友人と私が目にしたのは、車内のあちこちに出来た血溜まりであった。倒れている人も二、三人いる。木造の車体は銃弾で無残に裂けた穴がいくつも開いている。鉄橋に渡した細い橋げたの上に、デッキから夢中で飛び降り、三十メートルほど鉄橋の上を渡り、林の中に駆け込んだ。

機関車は車体の半分ほどが鉄橋の上で止まっていた。ボイラーから湯が激しく吹き出している。林の中に入り、立ち止まったら、急に足が、がくがくして震えが止まらなくなった。

一緒に行動していた友人が鼻を怪我したらしいと銃弾で

そがれた傷を指で触っている。彼の学帽からも血が噴き出している。学帽の一部がそがれ、頭には指の長さほどの傷があり、肩からも血が滴っている。そのことを告げると、彼は頭、肩の傷に指を突っ込み倒れかけた。丁度、そのとき駆けつけた人たちに抱きかかえられて、応急手当をしている所に連れて行かれた。彼が座席に座り、私はその前に立っていただけの違いなのに、私は幸いなことに、かすり傷ひとつ負わなかった。そこから東秋留駅までのことは、まったく覚えがない。五日市の家によりやくたどり着いたとき、親指がひどく腫れているのに気がついた。逃げる時につき指をしたらしいが、どこでやったのかはまるで覚えがない。つき指を理由に二、三日学校を休んだが、本当は列車に乗るのが怖かったからだ。

その十か月前に少年航空兵を志願していた軍国少年も、戦争の現実の恐ろしさを初めて思い知らされた。軍国主義教育にすっかり洗脳されていた私は、天皇陛下のために敵の空母に体当たりして死ぬのだろうと心底から考え、少年航空隊に志願したのだった。

丁度その頃、父の友人が空襲で火傷を負い、しばらく我が家に逗留していた。その人は退役陸軍少将で、軍国少年の私には、その人が我が家に居るのが誇らしかった。しかし、その将軍と父が「この戦争は余りにも無謀だ。必ず敗れる。」と話しているのを聞き、怒りに震え、何としても神国日本の人柱になるのだとの思いをいっそう強くした。

五日市線の戦闘機の攻撃は、広島・長崎の原爆や東京大空襲の惨禍に比べれば、ほんの些細な出来事かもしれないが、軍国少年だった私も、あの出来事を通して戦争の本当

の恐ろしさを思い知らされた。

戦後七十二年たった今、教育基本法が改悪され、管理と競争の原理に基づいた教育で、再び私のような軍国少年を生み出すのではないかと危惧される。また、ここで憲法が変えられたら、いつか来た道へ逆戻りすることになる。憲法の改悪は絶対に許してはならない。広島や長崎、東京大空襲、その他の犠牲者に対して、それが今生きている私たちの責務ではないだろうか。

市内の戦災

太平洋戦争の戦火は国民の日常生活現場に及びました。幸い、本市は軍需施設等がなく純農村地帯であったため町全体を目標とするような空襲を受けることはありませんでした。

しかし、米軍戦闘機がしばしば低空をかすめたり、空中戦、機銃弾の空やつきようが空から降ることもありました。昭和20年3月を過ぎると空襲は連日となり全国の主要都市は焦土と化し、多摩川周辺でも農夫が狙われることもしばしばとなりました。秋川地域で昭和20年4月から8月の終戦まで警戒報及び空襲警報の発令は53日にのびました。

【五日市線列車襲撃】昭和20年7月28日、東秋留二宮先、旅客列車五日市線が西進中、米P-51ムスタングによる機銃掃射により旅客3名死亡、その他多数が重軽傷を負いました。

【海老沢寮襲撃】昭和20年7月28日、米軍P-51ムスタングの機銃掃射により学童疎開児1名死亡、3名が重軽傷を負いました。

【爆弾】西秋留駅付近畑に爆弾が1個落下し、1名が死亡しました。そのほか、留原中村と深沢の山林に1発の爆弾が落下、また、檜原村山中に米軍戦闘機1機が激突、炎上しました。

※八王子空襲

本市の隣接市である八王子では、八王子駅が東日本の鉄道における重要都市とみなされ、また、軍需工場労働者の住居や疎開した人が多かったことから、昭和20年8月2日、米軍機169機により2時間にわたり1600トンの空襲を受けました。これは、本土空襲では3番目の投下量で、市民一人当たり10個相当の焼夷弾にのびります。これにより、約450名が死亡、約1万5千戸が焼け落ちるといふ惨状となりました。



子どもと戦争

中島 祐子

私は、小学校と中学校時代を先の戦争と終戦後の混乱期の中で育った。子どもの時、甘い菓子を食べた記憶も無ければ、きれいな絵本やおもちゃを店で見た覚えもない。

私が就学する前年に、太平洋戦争が始まった。そして、その年に父が出征した。

その頃、私達家族は東京の江戸川に住んでいたが、戦争が激しくなると、真っ先に食糧が無くなった。空腹になると、キャベツの千切りをおやつ代わりに食べた。どんぶり一杯の雑炊を手に入れるために、雑炊食堂の周りを大勢の人が取り巻いて何時間も待っていた。家で風呂を沸かす燃料も無かったので、町の銭湯は、連日芋を洗うような混みようだった。そこでシラミをもらってきた。体中あちこちを刺され、みんなボリボリと掻きながら、毎晩、裸になつては、下着の縫い目にずらりと並んだ白いシラミ取りをした。

登校は、集団登校だった。途中、六年生の班長さんが何回か「敵機来襲、伏せ。」と叫ぶ。みんなは両手で眼と耳をふさいで道路の隅の方に伏せるのだった。また、二年生の時は担任の先生が召集された。朝礼台で軍服を着て、タスキがけをした別人のようになった先生を、全校生徒が日の丸の旗を振り軍歌を歌って見送った。

空襲を逃れるため、一家で母の実家のある山形県の新庄

に疎開することになった。母や兄や姉達は家の始末や引越しの準備があるため残ることになり、私一人が一足先に祖父が迎えに来てくれて行くことになった。全く知らない所に、九歳の子どもが初めて親元を離れ一人で行くのは、たとえようもなく心細く不安だった。何か月か経って、母達をやつて来た。農家だった母の実家にみんなで居候させてもらい、肩身の狭い思いをして暮らしていたが、いつまでも居るわけにもいかず、自分達の住む所を探さねばならなかった。やっと見つかった家は、町中の家の二階の間だった。

そんな中、戦争とはいえ、子どもの生活は、けっこう楽しいものだった。春夏秋冬、自然の中での友達との遊びは何もかも珍しく新鮮だった。夏は田んぼの間を流れる小川でパンツ一枚になって遊んだ。川底の石拾いをしたり、鬼ごっこをしたりして、寒くなると、そばの田んぼの水に入る。水はお湯のように温かくなっていた。特に、豪雪地帯の冬は初めての体験で寒さや猛吹雪は厳しかったが、子ども同士いろいろと遊びを考えだしては、大人の苦労をよそに毎日暗くなるまで夢中で遊んだ。家の手伝いもよくやつた。田植え、刈入れは家族総動員だった。今のうちに何も機械のない時代、お米になるまでは大変な苦労があった。秋は毎晩夜なべ仕事が続いたが、夜食が楽しみだった。いつもお腹をすかしていた。大人の目をかすめては、ニンジンやサツマ芋などを取ってきて生でかじった。やがて、戦況は日増しに悪化し、静かだった田舎にも敵の飛行機が飛来するようになった。女学校の帰り道、姉が機銃掃射で狙われたり、金華山沖の艦砲射撃のドーンドーンという音が

奥羽山脈を越えて聞こえるようになって恐ろしかった。

四年生の時、終戦を迎えた。ガラガラと真夏の陽射しが照りつける昼下がり、大人達はラジオの前にうなだれて座っていたが、私は外に飛び出して、「恐ろしい戦争はこれで終わったのだ。」と友達と喜び合った。翌年、父がジャワ島から生還した。栄養失調でげっそりと痩せ、その上マラリヤの高熱で耳も遠くなっていた。これで家族がそろって暮らせるかと喜んだのも束の間、その後の生活はさらに苦しかった。米どころではあったが、よそ者に食べさせてもらえる米を手に入れるのは容易ではなかった。いわゆるタケノコ生活で、一家はどうにか生き延びることができた。母の着物も家財道具も次々といつの間にか、米に変わっていた。私の一番の宝物だったおひな様とオルガンも、とうとう売られる羽目になり、泣く泣く見送った。ついに売るものも無くなって、食べるために両親は闇屋になり、列車の中に取り締まりにビクビクしながら東京に米を売りに出かけた。終戦前後の学校も混乱していた。教師が足りず、女学校の四年生（今の高一）を終えたばかりの若い先生が担任になったり、教室不足から二部授業をしたり、一時は、一学級七十一名と超スシヅメ学級だったこともある。入口から自分の席まで行くのに他人の椅子の上を歩いて行った。ちようど学制が六・三・三制に変わったこともあって、私は、小学校を四校も変わった。

銃後の女性たちが皆そうであったとは言え、女手一つで育ち盛りの三人の子どもを物資もなく、一家で疎開をいたし、夫の戦死の報がいつ入るかと思おののきながら育てた母の苦労は、並大抵ではなかったろう。私の戦争体験は、

辛い直接戦禍を被るようなことは無かったが、戦争遂行のためには国民一人一人の生活すべてが犠牲にされ、ただその一つの目的のために自由を奪われ、どんなことにも黙って堪え忍ばねばならなかった。

むなしく愚かな戦争は、絶対に繰り返してはならない。戦争は政治が起こすものだから、人はそれを防ぐことができる。先の戦争では国民は知らぬ間に巻き込まれていった。また、いつか来た道をたどろうとしているように感じられる今日、同じ轍を踏まないために、今私達にできることをやらなければと強く思う。私は、子どもの時かなわなかった夢を今かなえ、音楽三昧の日を送っている。

疎開

昭和19年、大都市の空襲は必至となってきました。あきる野市は、純農村地帯であり攻撃目標となる戦略的価値を持たなかったため、町全体が攻撃対象となるような空襲もなく、疎開地としての役割を果たしました。

【個人的疎開】知己・縁故関係によるもの

【集団疎開】児童の集団疎開

【天皇写真疎開】通常、各学校で天皇の写真（御真影）を学校敷地の神社風の建物（奉安殿）に安置していました。学童疎開同様、都区内小学校の「御真影」や教育勅語謄本の疎開が行われました。

【文化財の疎開】養沢の私家土蔵に（当時）上野美術館所蔵、（現在、東京藝術大学所蔵）重要文化財の狩野芳崖「悲母観音」をはじめ数十点の絵画などが疎開されました。また、多西村の私家土蔵等に日比谷図書館蔵書が疎開されました。※「疎開した40万冊の図書」（金高謙二著）に詳細



兄とその家族、そして私

瀬沼 辰正

「昭和二〇年八月十五日時刻不明、満州牡丹江省むう稜県むう稜東南方約四キロ東寧街道付近で戦死、東京都知事安井誠一郎報告、昭和二十九年一月六日受付除籍」

これが、二男邦福（クニトミ）（父・亡瀬沼利氏、母：マサ）の除籍の記載です。

兄、邦福が出征したのは、昭和十七年の夏だったと記憶していますが、千葉の国府台の工兵部隊へ入隊し、翌々日満州へ派遣されたようです。その後、熊岳城の陸軍病院からのはがきが来たりしましたが、昭和二〇年七月二十七日付けのはがきを受け取ったのは、終戦からしばらく経ってからだと思います。そのはがきには、「元気で軍務に従事しているので、ご安心下さい。」などと書いてありました。

邦福兄が糠沢ハスエと結婚したのが昭和十五年七月なので、新婚生活二年で、兵隊にとられたことになります。それも、就職先が鹿島組という土建会社だったので、転勤が激しく、結婚した当時は、山形県の鶴岡の近辺で、その後岩手県の宮古町、新潟県の南魚沼郡貝野村などを転々と移動し、最後に東京本社に落ち着いたのが、昭和十七年三月だったと思います。しばらくは、実家のある油平から東京の八重洲まで通い、そしてその七月、召集令状が来たのでした。立川の南口へ降りて五分ぐらいのところ（柴崎町）に一戸建ての貸家を借りて、やれやれと思った二か月ぐら

いのことでした。立川に引越しをしてから間もなくの頃、「今までは、（一番上の）兄ちゃんがお前の面倒を見てきたが、これからは俺が面倒を見るからな。」と言われました。また、出征するに当たって「俺に若しものことがあったら、ハスエのことを頼むぞ。」とも言われました。前言はそれを果たすことなく、後言については、若しものことがあり、邦福兄は、帰らぬ人となりました。当時、学生であった私は、ハスエ義姉の世話になり、立川の借家から学校へ通っていました。お金のこともあり、十か月ぐらいでハスエ義姉は山形県の温海温泉駅の官舎へ帰っていきました。そこで、ハスエ義姉は、実母の死や、父親の再婚やら、いろいろなことがあって、終戦を迎えたのでした。

戦後のハスエは、駅の官舎で父親、義母、妹の洋子（ヒロコ）、弟の章雄（アヤオ）と同居していましたが、父親が脳梗塞になり、国鉄を退職してからは、大変な日々を過ごすことになりました。退職してからは、官舎にいる訳にもいかず、母親の実家である福島県本宮町の糠沢家の六畳一間に四人で一緒に暮らすことになり、勿論、父親の後妻は離婚し、育ち盛りの妹と弟を抱え、脳梗塞でおかしくなった父親の介護に明け暮れた毎日のようでした。

洋裁学校に通い、洋裁の技術を身につけ、収入の道を探しながら、そうしている間にも、夫の邦福の行方が分からない状況から、あちこちの復員局の世話課へ行き、行方の分からない邦福の情報を求め続けたのです。その期間がほぼ九年に及びました。闇タバコの紙巻の内職をビクビクしながらやったり、「明日食べる米が無いのに、映画を見に行った」という話もこの頃のことでした。

昭和二九年一月に邦福兄の戦死の公報があり、二月に葬儀を済まし、同じ年の十二月十三日、夫死亡により寡婦になったハスエの戸籍に私が入り婿したのでした。そして、その日から一か月後、邦福兄の帰還を待ち続けた母は七十年六か月の生涯を閉じました。

召集令状を受けて戦線にたつ兵士に対しては、太平洋戦争初期の頃までは十数本の幟旗（のぼりばた）を押し立て、それぞれの氏神に集まって町村主催の武運長久祈願祭を執行、駅頭から親族・近隣・各種団体・児童、その他町村民多数の見送りの中、出立しました。しかし、戦争も苛烈の度を加え物資人手のひっ迫を告げるようになると幟旗などは消滅し、非常に簡素なものとなりました。

出征

【戦没者】あきる野市においても完全到大戦の渦中に巻き込まれ、多くの人が従軍し、戦死しました。

多西村・西秋留村・東秋留村 326名

増戸村 103名 五日市町 209名 戸倉村 56名

小宮村 81名	合計 775名
---------	---------

（具体的な状況を二宮地区の兵士たちからよむ）

旧東秋留村の中で最も人口の多かった二宮地区の出征では、全戸数271軒のうち128軒（47％）で出征兵士・軍属を送り出しています。中には一家で5名出征した家もあり、出征兵士・軍属の合計数は157名（応召時16歳から44歳）でした。中でも戦況が厳しくなった昭和19年以降、高齢者の応召が目立つようになりました。戦死者も昭和19年から終戦までが全体の90％を占めており、この時期の日本軍の戦いがいかに悲惨なものであったかを物語っています。なお、戦死者の数は出征動員者の45人（約30％）に達しました。また、生還者111人（70％）のうち、6名はシベリア抑留を経た後、昭和23年以降に復員しました。

（旧）秋川市戦争を語り継ぐ会「会報第2号より」

（あきる野コラム）



満蒙開拓義勇軍・召集・シベリア抑留

小林 茂雄

私は伊東市に住んでいましたが、一九三九年十五歳の時、学校の先生から満州の開拓団に入ったらどうかと勧誘を受け、お国のためになるのならと、その気になりましたが、当初家族は反対しました。しかし、最終的には同意を得て同年十二月満蒙開拓義勇軍に入隊し、翌年三月まで内原訓練所で訓練を受け三月十九日に満州へ出発しました。

着いた所は葦河開拓団端代義勇隊開拓団でした。開拓団は総員約三百人でしたが、所有する区域は農地や森林がとて広いところでした。一九四三年以降は南方戦線へ移動した関東軍部隊の補充の為、私たちの開拓団からも召集される人が多くなり、青壮年男子はだんだん減少し最終的には団長まで召集され後に残ったのは病人、婦人、子どもばかりとなってしまいました。そして、その人手不足を補う為、中国人や韓国人を小作人として雇いましたが、その人達の衣食住は私達と全く同じでお互いを呼ぶのにも苗字や愛称で呼び合い同じ人間として、同じ釜の飯を食う仲間としてわけ隔てなく遇しました。

私も一九四五年七月二十三日に召集を受け延吉の第15267部隊へ入隊させられましたが、その別れ際に小作の中国人が、「カーさん（当時私の姓は川口でした）絶対に死んでは駄目だよ。」と言ってくれた言葉は今も忘れられません。

そして終戦、私たちは捕虜として極東シベリア、ホルモ

リン地区の山の中の收容所へ入れられ、少ない食料と極寒の中で強制労働をさせられました。主たる作業は鉄道の枕木を作る為の落葉松の伐採でした。そして一時は栄養失調状態にもなりました。

一九四七年十二月、木材の貨車積み込み作業の時、木材に足を挟まれ大怪我をし、地区の病院へ入院しました。その病院の扱いは丁寧で、特に私の世話をしてくれた看護婦さんは本当に親切で捕虜を扱うなどと言う態度は全くなく、姉のような親しみを感じました。私の傷が癒えたとき仕事に体を慣らすため病院の練成隊に編入され軽作業をしました。病院で死亡した人の埋葬などもやりましたが、運命とはいえ、家族に看取られもせず一人寂しく死亡し、シベリアの凍土に埋められる仲間を、家族が見たならば大変な悲しみであると思います。

私の足の傷は完治し、一九四八年二月に退院し、樺太部隊の收容所へ入れられ、そして六月には帰国することができました。帰国してから私の所属していた開拓団の数少ない帰国者の人達にも会いましたが、次のような話を聞きました。

①ソ連軍が侵攻してきた時、小作として働いていた中国人や朝鮮人が開拓団の婦女子を守ってくれ、反日中国人による殺傷や略奪は全くなく、全員がハルピンに無事到着することができました。

②ソ連軍が侵攻してきた時、一時葦河からイーマンパへ避難しましたが、その時荷物を小作の中国人に預けていきま

した。後日、再び葦河へ戻り荷物を受け取りましたが、紛失した物は一つもありませんでした。

③しかし、ハルピンでは飢餓、寒さ、病気などにより多くの団員が死亡し帰国できた人は少なくなっていました。

上記のことは、私たちの開拓団が中国人や朝鮮人を同じ人間として、また仲間としてお互いに信頼関係を築いていた為と思います。ソ連人も中国人も朝鮮人も個人としては信頼できる人達でした。

満州に関し日本政府は王道樂土、五族協和などと宣伝し多くの開拓団も送り込んでいましたが、その実態は逆のことをしていたものと思います。

青い目の人形「シャロン」

1989年に旧戸倉小学校で青い目の人形が発見されました。青い目の人形は、大戦前の1924年にアメリカ人のシドニー・ギョリック氏が「世界の平和は子どもから」の体现のため日本に送った1万2千体の親善人形です。しかし、その後、日本

はアメリカと戦争を始めたため、敵性人形としてその多くが壊されたり焼かれたりして処分されました。ところが、中には処分を忍びなく思った人が、人形を奉安殿の天井裏、床下、物置などに隠したため、その人形が戦後に約330体ほど発見されました。シャロンはその内の1体です。

また、1989年にシャロンが見つかったという報告を受けたギョリック三世(孫)は、1990年に新しい青い目の人形「ローラ」を旧戸倉小に届けました。

自らが生きることさえ困難だった大戦下に人形を守った人々がいた、彼らにとって人形は単なる物ではなく、そこに作り手、贈り手の心が宿る命そのものだったのでしよう。

彼らはなぜ自らの危険、命も顧みずそれらを守ったのか、未来の世代を思いやり平和を愛する心が戦時中にも確かにありました。大戦下において敵と戦うこと、憎むこと、そして時に死ぬことさえ良しとされた時代を生きた彼らは、現代に生きる私たちに「幸せになること、愛すること、そして真に豊かな人生を歩め」とささやき続けています。

「人びと」は残酷だが、
「ひと」は優しい

アジア人初のノーベル平和賞
詩人タゴール (1861-1941)



(左がシャロン、右がローラ)

「負けてしまう…」と言ったために

中村 靖子

八月十五日の東京の空は、輝くばかりの青空でした。十二時に重大な放送があると、ラジオのある家に大人も子どもも集まり、耳を澄ませました。ラジオからは、わけの解らない声と雑音で私には何のことかさっぱり解りません。大人たちは青い顔をして「どうも日本が負けたらしい。」とささやき合っていました。このとき私は九歳。大人たちの不安な様子を見て、怖くなりました。

国民学校（小学校）二年生のとき、青梅に疎開をしました。まだ授業も学芸会もしていましたが、そのうち授業時間も少なくなり、木刀振りや竹槍の訓練をさせられました。敵兵が上陸したら、戦うためです。しかし実際は、敵兵は一人も上陸せず、上空にはB-29が何十機も飛んで来て、日本中の都市に爆弾を落とし、焼け野原にされて何十万人の人々が亡くなりました。低学年のときは毎日麦踏み、草刈り、田んぼこね等勤労奉仕をさせられました。国民学校四年生になると飛行機の燃料にする松根油を取るために切り出した、赤松の幹を二束ずつ背負って急斜面の山から麓の村に運びおろす奉仕をさせられました。弁当は持参で支給なんかされません。食糧事情はとつくに悪くなっていて、弁当箱の三分の一が、いも等です。でもまだ食べ物があるだけでも良かったのです。国策で疎開させられたのに、私はよそ者、居候と肩身の狭い思いをしました。

戦火はひどくなり、東京も丸焼けになり、八王子も爆撃され、夜空はオレンジ色に輝き、その中をしだれ花火のようには焼夷弾が無数に落とされていました。怖くて怖くて足が震えました。日本は正しい神の国、この戦争は聖戦であり、必ず勝つと教え込まれていましたが、毎日毎日、日本の国土は焼かれ、家も着物も、食物もなくなり、こんなで日本は本当に勝てるのかと不安になりました。

「負けてしまうのではないか。」と友達に喋ってしまいました。さあ大変、悪がきどもに知れわたり、お前は「非国民だ。」とののしられ、石を投げられました。大人たちはとつくに「日本は負ける。」と感づいていたでしょうが、こんなことを口に出したら大変な目にあうので誰もが黙っていました。

この件があつたので私は早めに東京へ帰されました。祖父の自転車に乗せられて着いた東京は、一面の焼け野原で、焼けただれた何とも言えぬくさい臭いが立ち込めていました。祖母は、「焼死した人々の無念の臭いだ。」と言いました。それから間もなく多くの犠牲と悲しみを持って日本は負けました。



東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑
(墨田区都立横綱町公園内)

だまされて飢えと極寒のシベリアへ

小池 長之助

満州のハルピン近郊にある新香坊の収容所にいた一九四五年九月下旬、帰国するということで貨車に乗せられました。スイフンガを通りウラジオストクから船へ乗るといのです。乗せられたのは、無蓋貨車でした。私の貨車は囲いの一部分が無く、端の方へ行くと危険でした。一両に多くの兵が乗り、随分窮屈でした。

列車は走ったり止まったりして、三〇四日は乗っていたでしょうか、幸い雨は降りませんでした。食事はクロパンだったかもしれません。用便は、小は貨車に乗ったまま外に向かつて、大は停車した時、線路の付近でいわゆる野糞です。一度に何人もやります。大勢の目がありますが、我慢するわけにはいきません。それにみんな同じことをしているのですから恥ずかしいなどという気持ちは起きません。私たちより先に通過した人達の糞もあちこちに残っており、気をつけないと踏んでしまいます。列車が止まった時は警備のソ連兵（ソ連兵だけまとまって乗っている）が、日本兵の乗っている無蓋貨車へ二、三人で乗り込んでくるのです。腕時計、万年筆、財布、その他めぼしいものを「ダワイ、ダワイ」と言って強奪していくのです。私たちは抵抗できませんし、周りの人達も庇ってやれません。奪われた人は運が悪いのです。腕に二つも三つも腕時計を嵌めているソ連兵が何人もいました。そのうちソ連兵が私たちの貨

物に近づいてくると、全員で「ワーツ」という大声を出すようになりました。するとソ連兵も悪いことだとの若干の自覚もあるのでしよう、貨車に乗り込むのを途中でやめるのです。しかしそれも何回か続くと効果が無くなってきました。このようなことで輸送中に多くの人が貴重品を奪われたのです。

列車は「横道可子」に着きました。ここから先へは列車が通行不能になっっているため山中の戦闘跡を海林まで歩かされました。隊列の前後左右には自動小銃を持ったソ連兵がついておりただ黙々と歩くだけです。私達のほかに民間人の集団も歩いており母親が大きな荷物を背負い十歳代の男の子が乳児をおぶい足には大人の地下足袋を紐で縛りつけぬかるんだ山道を歩いているのです。その姿が哀れで今思い出しても涙がでます。この後、民間人の集団にはトラックが来てどうしても歩けない者だけを乗せていきました。

山中には日本軍とソ連軍両方の破壊された戦車（ソ連軍の戦車は茶色でガッシリして大きく、日本軍のは茶色や緑色で迷彩が施されていますが小型で、ソ連の戦車に比べると子どものような感じでした。）やトラック、人や馬の死骸が放置され腐臭が鼻を突きました。とても嫌な臭いです。

飯盒で食事を作る為、兵士の死骸がのめり込んでいる小さな流れの水を知らずに使ってしまった、後で嫌な思いをしました。中には死体を埋めてあるのですが、急いでいたのか片足だけ地面の上へ突き出ているのもありました。

海林へ着くまでに二回の野宿をしましたが、夜は寒く天幕は無く火も焚かず、ただ土の上へごろんと横になるだけです。私は新香坊の収容所で手にいれた防寒外套を上には掛

けて寝ましたが、朝目が覚めると外套が霜で白くなっていました。夏服だけで寝た者達は堪えられなかったでしょう。

海林、牡丹江の收容所を経て、十一月三日、再び帰国の貨車に乗せられました。列車は走り出しました。そして一晩たち翌日、太陽が昇りその位置から推測すると北へ向かって走っているようです。「おかしい。」と言う人が出ました。それに対し無理な理屈をつけてそれを打ち消すようなことを言う人もいましたが、そのうちハバロフスクへ着き極東シベリアへ入ったことは決定的となりました。ソ連側に完全に騙されたのです。或いは将校達は承知していたのかどうか。帰国の話にはみんな若干の疑問を持っていたのですが。でも帰れない事がはつきりしたことは本当に辛いことです。これから先のことについて色々な話が出ました。シベリアで森林伐採の強制労働をさせられるのではないか、或いは要塞建設をさせられ殺されるかもしれないとか。宮本上等兵が私物の荷物から子供のオモチャ（人形だったと思います）を取り出し貨車の外へ投げ捨てました。もうすぐ妻や子に会えると思って大事に持っていたのに本当に辛い気持ちだったでしょう。みんな似たような気持ちでした。列車はハバロフスクからアムール河を渡り、原野或いは林の中を走りました。薄暗くなった夕刻、時々原野の中に平屋の小さなロシア人の家がポツンポツンと見えるのです。窓がほんのり明るくなっています。「こんなところに住んでいるけれど私達と違って自由があるのだなあ。家の中には家族もいて暖かいのだろうなあ。」などと、もうどうにもならない自分達の身と引き比べ羨望とやり場の無い苛立ちを強く感じました。

私の戦争体験

岡 道子

私は一九三八年、中国の旅順で生まれました。当時そこは日本の植民地で日本人が完全に支配する社会でした。日中戦争が始まっているのに戦争の気配はあまり感じられませんでした。私の家族は、両親と子供六人で、病弱な兄と姉がいましたが、父一人の働きというのに私達の赤ん坊の時は、子守として中国人の少女（姑娘）を住み込みで働かせていました。彼女らは、一旦、赤子をおぶって外へ出ていくと、何時になっても帰らず、母は授乳・おしめ等大丈夫かと心配したそうです。彼女達にとっては、公園などと同じ境遇の友達と共に大いに羽を伸ばすチャンスだったのではないのでしょうか。彼女達に給料を払ったのでしょうか。

そのうち映画館のニュースで、戦況を知るようになり、海上で軍艦が飛行機から（潜水艦からか）攻撃されて物凄いい水柱がたち、軍艦が沈んでいく様を見ては、心底怖いと思いました。兄は中学五年で予科練に志願して三保の航空隊に入りました。毎日の食事は、お米の配給が少なかったのでお粥です。兄の為に母は毎日供えた陰膳も多分お粥だったのでしょうか。姉が海軍の物資部で働いていましたので、時々ま貰ってくる氷砂糖が待ちに待ったおやつでした。そのうち姉が「サイパンが玉砕した！」と泣きわめき、今度敵がここにも攻めてきて、私達も死ぬのだと言います。私は胸がどきどき怖くてたまりませんでした。

一九四五年、小学校（国民学校）に入学、空襲もなく通っていました。通学路の途中、軍港の傍を通らねばならず、なぜか不気味でした。白系ロシア人らしい人を見ると、子供同士で「スパイだ」等とささやいたりしました。八月十五日、私達子供三人は夏休みで、晴れ渡った炎天下、外で遊んでいました。結核で寝ていた兄はラジオを聞いて「お母さん、日本は負けたよ。」と言って泣いたそうです。そして九月三日に亡くなりました。概して戦争の恐ろしさ、空襲等を、身をもって体験することもなくのんびりと過ごした子供達でした。

しかし、これ以後、我が家も難民です。ソ連兵が我が家へも来ます。二十歳の姉は、近所の若い女性達と山へ逃げ、母と子供三人は家の奥に逃げ、父がソ連兵と対応し目ぼしい物は何も無いと言っても、姉の皮のランドセルがいつの間にか持つて行かれていました。日本人はみな日本へ引き揚げねばなりません。引き揚げ港のある大連へと、知人を頼って転々と移動です。やつと落ち着いた所は、中学生の寮でした。寮生の部屋が多数と広い食堂がありました。生徒はいなくなり、舎監の先生の家族と、生徒の部屋に既に三、四家族が別々に入っていました。私の家族は厨房近くの部屋に落ち着きました。

大連には、「満州」各地から日本人が続々つめかけていて仕事もあります。父はますますひどくなるリュウマチの為歩くのもままなりません。母が自分の着物等を売りに繁華街や市場に行きます。買ったたかれて、いくらにもならなかったり盗まれたりです。タケノコ生活も底をついたのか、油を取るために搾った大豆のかすをどこからか仕入

れてくるかまた何に使うか知りませんが、売りに行っていました。私達三人の子供はお金がなく学校をやめさせられました。私には嬉しいこと、なぜなら行くべき光明国民学校では生徒があふれて、より遠い専門学校まで行かねばならず、友達もできず楽しくありません。家にいれば同じ寮の子供達と遊んで暮らせるのです。しかし、すぐに子供も遊んではいられなくなりました。母は屋敷内にたくさん咲いているライラックの花を切って私達子供に繁華街で売らせました。ソ連の婦人くらいしか買ってくれませんが。また煙草や万頭も道端に台を置いて売りました。万頭の誘惑にはたまらず一つつまんだこともあります。父は金策なのか知人宅へ行くので私達を伴って外出し、帰途、家が近くなつたので私達は自分の歩調で早く帰りました。父はかなりたつてから帰宅しましたが、厚いオーバーは追剥に剥ぎ取られ顔に泥を塗られて目は腫れていました。「暴動」に入られ、壊れた家もよくあり、また我が家にも泥棒や強盗も入りましたが、何もないのにびっくりしたことでしょう。当時の大連は、中国人社会も混乱していて日本人への憎しみを持っている人もいたのでしょうか。

主食は、ほとんど小鳥の餌と同じ粟で、炊いてもサラサラ、湯七分その下に粟三分程が沈んではっきり分離していました。惣菜は、しな大根を下ろしたもの、アガサの煮物しか思いだせません。時にはトウモロコシの粉で作った万頭（ピンズ）も買って主食となりましたが、ポロポロと崩れて味も馴染めません。冬は炊事用の水槽に凍りつく厚い氷をかいて食べるのが唯一のおやつです。着る物は着たきりでお風呂もなく垢にまみれるせいか、家族全員に虱がわ

きました。煮沸消毒をしても、極寒の冬の夜、衣類を屋外に置きっぱなしにしても虱はまたわき、皆悩まされ続けました。

一九四七年二月やっと引き揚げの番です。大連の埠頭に多くの「難民」がびっしり集まっていました。今にも死にそうな人も横たわっていて、私達もどうなるのかと不安でした。でも私の家族のどん底生活は、やっと終わりました。

戦中・敗戦後の恐ろしい、ひもじい思いをした生活は、私の生涯で最も厳しい時で、（誰にも二度と繰り返させてはいけない生活ですが）その中で「至福の時」と感じた時があります。一つ、粟のお粥しか食べられない時に、真っ白いクリームに包まれて真っ赤な苺が乗ったショートケーキにお目にかかり、そして八等分位食べられたことです。今思い出してもその味は本物だと思います。どうしてそんなに全く別世界の物が手に入ったのか不思議です。二つ、虱に悩まされている時、一年ぶり位でお風呂に入れたことです。そこはかなり遠い所へ家族で歩いて行った銭湯でした。束の間の極楽でした。三つ、引き上げ船の中で出された白米のご飯は、初めて本当に美味しいと思い噛みしめて食べたご飯でした。



おわりに

子どもたちは、快晴の青空を気持ちよさそうに飛んでいる飛行機に、笑顔で手を振ることができます。このことは、現代を生きる私たちにとっては、当たり前のことです。

しかし、七十年以上前の時代はどうでしょうか。この体験記の時代を、想像してみてください。

もし、飛行機から逃げなければ、爆撃や機銃掃射により命を失う、死に物狂いで飛行機から身を翻すように隠れて、逃げて、生きなくてはならない時代が、本当にあったのです。

私たちは当たり前のように、今の平和を享受していますが、それは、時代に抗うことのできなかった市井の人々が、「戦争」という苦しく悲しい無数の体験や涙を「平和への想い」という結晶に純化させながら、切なる想いで築き上げてきたものです。もしかしたら、その一つ一つの結晶は石より硬いダイヤでも、「築かれている平和」という城は、新しいエネルギーが補給され続けなければ平衡状態は保たれず崩れてしまう、砂でできた城のようなものかもしれません。

ここあきる野市では、平成十三年に世界平和や人権尊重、環境、教育等の基本的精神をうたった「あきる野市民憲章」を制定しています。市では、この市民憲章の理念にのっとり、今後も平和事業に取り組んでまいります。

結びになりましたが、改めまして、戦争体験談を寄稿してくださった皆様に深く心から感謝申し上げます。そして、戦時中のご苦勞された分まで、末永く穏やかで幸せな日々を過ごされるよう願っております。



あきる野市民憲章

秋川の清流を抱き、緑あふれる豊かな自然に恵まれた郷土あきる野では、はやくから先人たちが文化の育成や産業の振興につとめてこられました。

わたくしたちは、この良き伝統を引き継ぐとともに、このまちに一層の誇りと責任をもち、活力と創造力に満ちた人間性あふれるまちづくりをめざして、ここに市民憲章を定めます。

一 清らかな川、緑豊かな山や丘陵を大切に守り育て、みずみずしいまちをつくります

一 一人ひとりを互いに尊重し、社会のきまりを守りつねに世界に心をひらいて前進する、連帯感あふれる明るいまちをつくります

一 子供やお年寄りをいたわり、思いやりのある若い力の育つ、さわやかなまちをつくります

一 歴史や伝統を大切にし、地域の個性を活かすとともに、産業のさらなる振興につとめ、たくましいまちをつくります

一 スポーツや芸術を愛好し、健康で文化の香り高い、こころ豊かなまちをつくります



平成十三年五月三日制定





あきる野市 戦争体験記

平成 30 年 8 月

発行 あきる野市役所総務課

(住所) あきる野市二宮 3 5 0 番地

(電話) 0 4 2 - 5 5 8 - 1 1 1 1

太平洋戦争年表

昭和 16 年 (1941 年)

- 12 月 8 日 日本、ハワイ・真珠湾を攻撃に勝利し、対米英宣戦布告
アジア・太平洋戦争 (大東亜戦争) 開戦

昭和 17 年 (1942 年)

- 2 月 15 日 日本軍、シンガポールを占領
4 月 18 日 東京初空襲
6 月 5 日 ミッドウェー海戦で敗北

昭和 18 年 (1943 年)

- 9 月 8 日 イタリア、連合国に降伏
10 月 21 日 学徒出陣のはじまり

昭和 19 年 (1944 年)

- 7 月 7 日 マリアナ諸島・サイパン島の日本軍守備隊全滅

昭和 20 年 (1945 年)

- 2 月 19 日 米軍、硫黄島に上陸を開始
3 月 10 日 東京空襲
3 月 12 日 名古屋空襲
3 月 14 日 大阪大空襲
3 月 16 日 神戸大空襲
3 月 25 日 名古屋空襲
4 月 1 日 米軍、沖縄本島に上陸
4 月 7 日 戦艦「大和」沈没
5 月 7 日 ドイツ・連合国に無条件降伏
5 月 29 日 横浜空襲
6 月 19 日 静岡空襲
6 月 23 日 沖縄での日本軍の組織的抵抗終わる
7 月 千葉空襲、仙台空襲、宇都宮空襲、函館空襲、北海道空襲、小樽空襲、
平塚空襲、呉空襲、青森空襲
7 月 26 日 連合国、ポツダム宣言を発表
8 月 1 日 富山空襲
8 月 6 日 広島に原爆投下
8 月 8 日 ソ連が対日宣戦布告
8 月 9 日 長崎に原爆投下
8 月 14 日 日本、御前会議でポツダム宣言受諾を決定
8 月 15 日 玉音放送、国民に戦争終結を伝達
9 月 2 日 戦艦ミズーリで降伏調印

